

## 月例会ダイジェスト【29】

「突然ですが皆さん、職場での存在感は大きいですか」。3月10日、今年度最後の月例会はそんな問いかけから始まった。題して「産業保健のプレゼンス」。プレゼンスを直訳すれば「存在」だが、存在感、影響力、信頼感へと意味を拡大し、新しい切り口から産業保健の本質に迫った。コーディネーターは高家望氏 (㈱東急スポーツオアシス ヘルスケア事業)、中留理恵氏 (㈱NSD 人事部健康相談室)、福田洋氏 (順天堂大学医学部総合診療科・准教授)、海野賀央氏 (SCSK ㈱ 人事グループ) の4名。

高家氏は冒頭で著名人の写真数枚を提示し、彼らから受ける印象は受け手それぞれに異なることから分かるように、プレゼンスには様々な意味合いがあるが、本日は存在感、影響力、信頼感を軸に産業保健職のプレゼンスを探ってみたいと提案した。続いて他3名がそれぞれの立場から思う産業保健のプレゼンスについて発言した。

中留氏は、週1日のアルバイトから正社員となり、健康相談室の立ち上げにかかわり3年が経過した現在までの経験を語った。周囲に情報を共有できる人もない中、保健師として、また人事部員として上司や産業医、従業員の意見や思いを調整することの重圧もあったが、健康診断受診率が100%になったこと、退職者が減少し傷病手当の給付も減ったことを健保と役員から評価されたこと等が自分のプレゼンスと言えるのかもしれないと控えめに述べた。

産業医の立場からは福田氏が、臨床医だった当初は産業保健について無知だったが、縁あって産業保健の道に入り、それ以降実感している国際学会や社会の変化について語った。根気強く社員のニーズに応えることから始め(社員が自分を知っている)、産業医としての社内での認知度や影響力を高め(会社が自分を知っている)、世の中を変える力になりたい(社会・世界が自分を知っている)と話した。さらに、産業保健職が目指す本当のゴールは、働く人すべてが自分の健康について考え行動し、自分たちが不要になる時だと述べた。

海野氏は主に健康増進施策を考える人事労務の立場から、世間一般では産業保健職の認知度がいかに低いかを、自ら籍を置いたことのある複数の職場を例に挙げて説明した。従業員数500名ほどの中小企業でもほとんどの社



高家氏

中留氏

福田氏

海野氏

員が知らず、専属で選任が必要な8,000名規模の現在の職場ですら、やはり9割以上の社員がよく知らないという厳しい現実。しかし、話はここで終わらない。氏が一番言いたかったのは「産業保健の目的を踏まえれば、『健康』に関連しない人事施策はないのではないか」という結論だ。人事担当者としては、その考えを理解してくれる人を巻き込み、やがては全社を巻き込んで産業保健のプレゼンスを高めていきたいという力強い提言となった。

質疑応答では中留氏への質問が相次ぎ、産業保健師の業務や事例への関心の高さがうかがえた。ティーブレイクをさみ隣席の人とのグループワークを数分間行い、プレゼンスを高めるための具体的なアクションプランを探った。人事を担当する男性からは「未知」の壁をそのままにして働くのは非常に不幸だとして、コミュニケーションの大切さが挙げられた。また、相手の常識をくつがえすようなインパクトのある言葉を伝えると自分の存在が印象づけられるので、自分の言葉で話すことが効果的だとする発言もあった。

特別編として用意された演出アドバイザー・北折一氏による話は、同氏の研修を受けたあと存在感が劇的に変わった産業保健師の事例である。彼女は過去10年間、健康講座やメールでの告知等の保健活動に社員の関心が集まらず悩んでいたが、受講後に大改造、クイズ形式やウィットに富んだ表現を満載したところ効果絶大、生まれ変わったように仕事へのやりがいを感じているという。伝え方を変えれば何かが変わる、それを信じてほしいと同氏は強調する。

最後に高家氏が、翌日でちょうど5年を迎える東日本大震災に触れた。当たり前と思ってきたことが崩れ多くの支援が入ったが、サポートが不要となった時が現地の人たちの本当の幸せへの一歩。産業保健もそのような、「空気・同伴者」のような存在(プレゼンス)になることを目標としていきたいと締めくくった。

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。

- ホームページ <http://sanpokai.umin.jp/>
- FBページ <http://www.facebook.com/sanpokai>